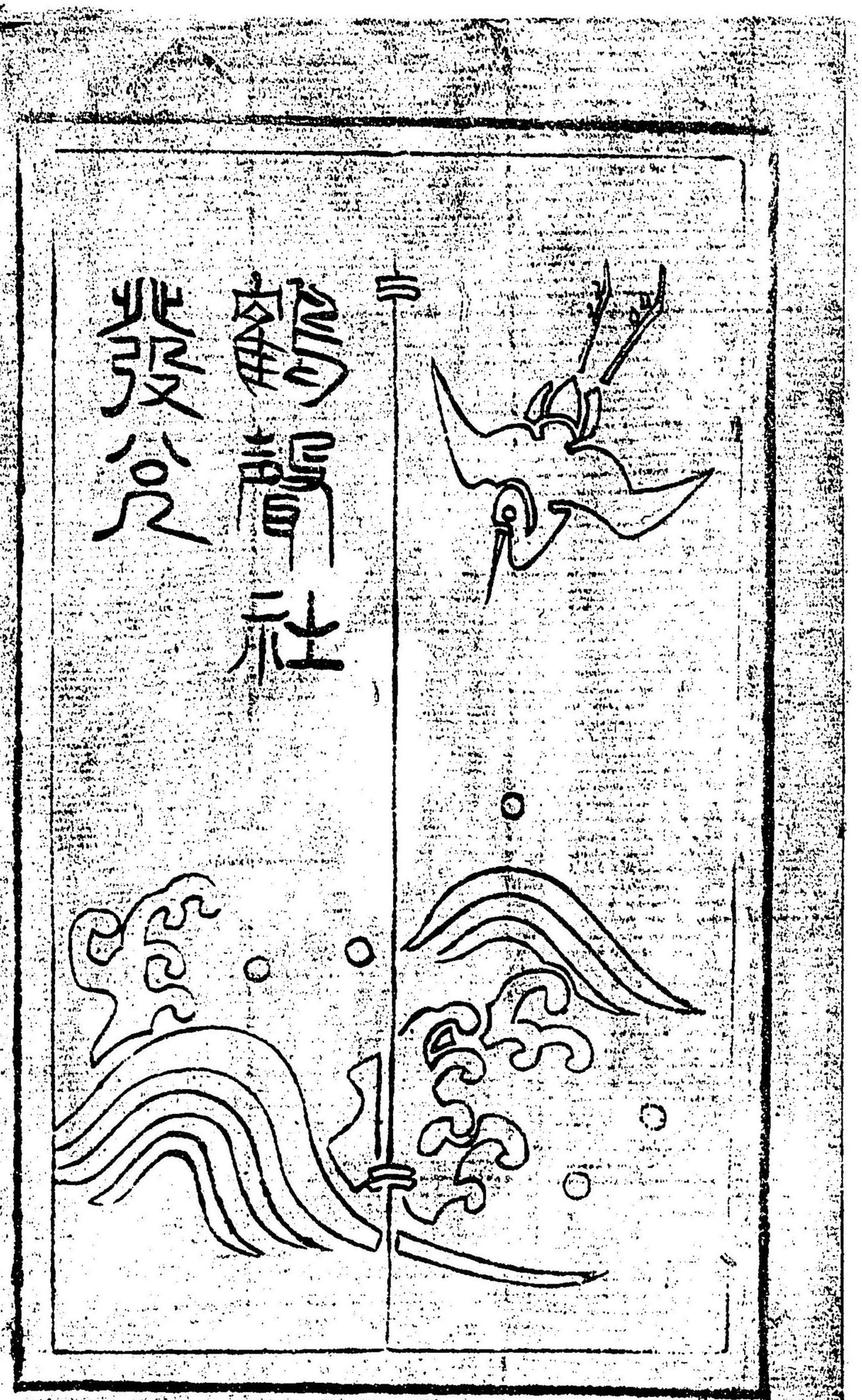
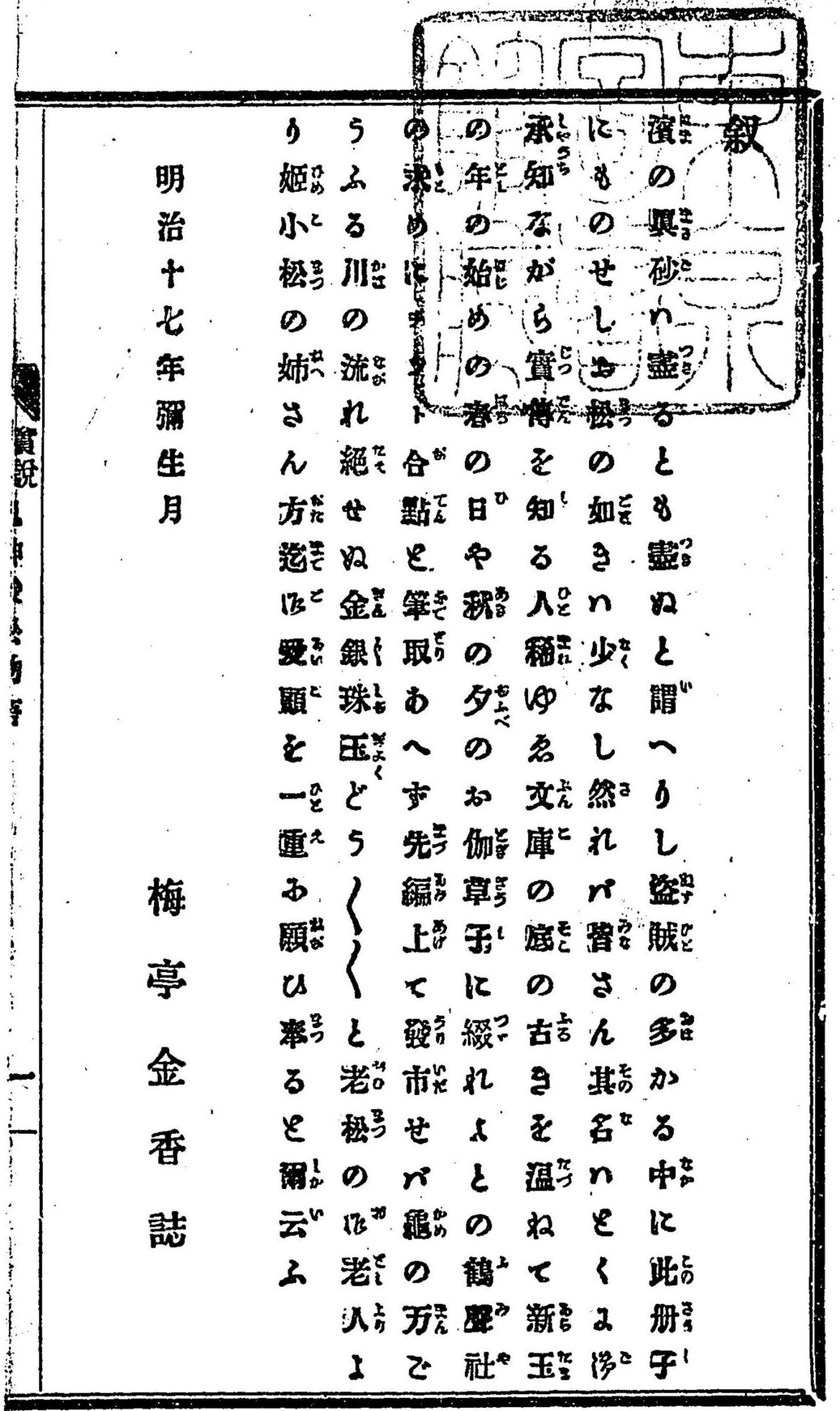
850

實説双紙鬼神(さんじん)於松物語(おまつものがたり)全





叙

濱の眞砂は盡るとも盡ぬと謂へりし盜賊の多かる中に此冊子にものせしお松の如きは少なし然れ共皆さん其名はとくより承知ながら實傳を知る人稀ゆゑ文庫の底の古きを温ねて新玉の年の始めの春の日や秋の夕のお伽草子に綴れよとの鶴鳴社の求めに合點と筆取あへず先編上て發市せば龜の万でうふる川の流れ絶せぬ金銀珠玉どう〳〵と老松の花老人より姫小松の姉さん方迄ぼ愛顧を一重ゐ願ひ奉ると爾云ふ

明治十七年彌生月

梅亭金香誌

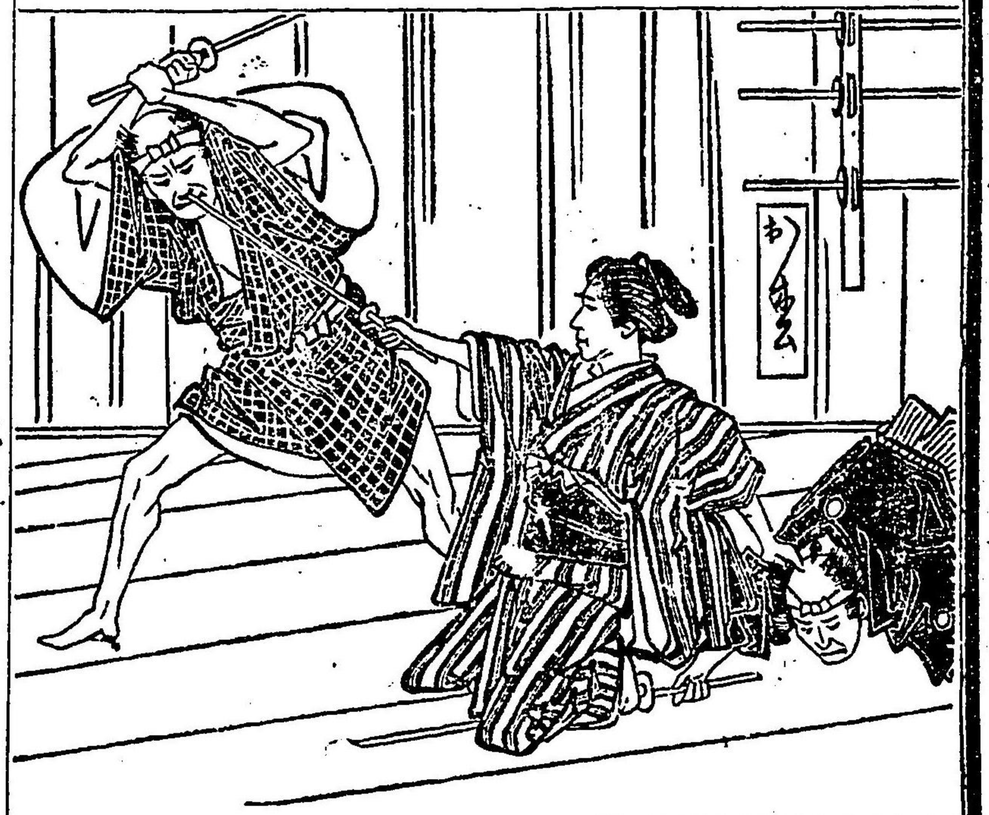
實説双紙

鬼神於松物語

東京　梅亭金香編次

○第一回

爰に奥州會津郡宮井村の郷士に伴代太郎國俊と云ふ者あり妻をお千代と云ひ夫婦の間に一人の女兒あり名をお松と呼なしぬさて國俊いお松が八才の夏上旬の頃氣分悪しとて打臥せしが日あまし大病とありて遂に看護の甲斐もなく夫が年の秋中旬の頃もろくも落る桐一葉と共に果敢なくなりたるにぞ妻のお千代い力あく〳〵野邊の送をすませ其后い只お松の成長すると樂みに心ばろくも暮し居たり然るにお松い容姿の美しさお似ずあら〳〵しき業をのみ好みて劔術擧法なンどを習ひ十三才の頃にいとや血氣の壯士も及ばぬ程に上達せしゥべ己れの術に誇りて近所の壯者と爭論しつ疵をゞ負する事あぞたび〳〵あるにお千代い行末を想ひやりいたく苦慮て居たりしがつもる苦勞のために覓に重き病症となりお松十五才の折黄泉の客となりにたり其臨終際にお松を枕邊ちかく招きよせ女の身おい用のあき武藝をまあび剩さへ人と喧嘩あどするい甚だもつて不所存おりと言葉をつくして異見しければお松も大きに先非を悔ひ是より後い身と慎み假にも荒き擧動いあさざりなり間話休題お千代の死去てより僅か十五才の女少一人にて如何せん術もあらざる故夫が母、方の伯父喜左衛門と云ふ者來りて万事の始末をなし今迄召つかひし奴婢等へい皆暇とやり田地屋敷い悉く沽却しつ其金と共にお松を我家へ引取けりそも此喜左衛門と云ふいお千代の兄にて當時奥州松島ある温泉場に旅宿をもつて渡世となすいと實直の者あ



りさて是より二年余りすぎお松十七才の夏七月の頃此温泉へ病氣養生に來りて喜左衛門の家に逗留しける夏目仙太郎兼人と云ふ侍あり年紀二十二三にして色白く丈たかく容貌うるはしき男子なりお松い何日しか是と見そめ胸と焦して居たりしが一日四下に人なき折をうかゝひ思ひの丈を言寄れば此方も年まだ若き身の迷ひがちなる戀の路其道ならぬ事とい知れどあつき情ゆはだされてふかく契を結びしより迭みに思ひいや増して忍びあふ夜のたびくなれば お松遂に其たねをやどし只あらぬ身となりにけり斯る程なれば二人が戀中い誰しらぬ者のなき迄に浮名たちけるにぞ兩人大きに忍をいため若此事が廉直い喜左衛門の耳に入あば如何おさんと安き心もせぬ折から仙太郎の家へ親許より手紙といたれば何事にやとひらき見るに其旨い此度伯父柿崎秋之進の次女楓を和兒の妻にもらひ請る事に相談を取きえし故病氣本復次第至急立帰るべしとあれば又もやきせし一ト苦勞如何したものかと一夜ひそかにお松にあひ書翰のわけと精しく話して石や左と相談したれど到底二人い片時も別きる念あければ斷然此家を落のびて何方へなりとも身をおちつけ末ながく添遂やうと若い同士の無分別にまよふた戀の闇にまきれ其夜のうちに此家をぬけ出少しの知己を忍あてに南部津輕の境なる笠松峠の麓浪華村に到りなり斯て知己の世話にて近き邊のさゝやかなる家をもとめ二人い此處に移り住居七月ばかり送る程よお松月みちてやすくと男の兒を產おとせしかば夫婦大きに喜び是を政次郎と名づけちりさへすゝ養育けり爰に又喜左衛門方にてい兩人逃亡せし翌朝はじめて夫と忍づき四方八方へ手配してたづね求めたれども更ゐ行衛知れざれば やと〳〵困じて居たりけり

○第二回

再説仙太郎夫婦い政次郎を設けしより其交情いよゝ睦しく只政次郎の成長するを樂みに一年ばかり送るうち知己の人い死去て程あく仙太郎眼病にかゝり醫藥の効もなく遂に盲目とぞなりけるかさねゝの失費ゐ貯への金い悉くつかひ果し所持の衣類も大方い沽却なしたる貧窮の中にゐ松い手一ッにて夫の介抱子供の世話まわり兼たる糸車くる糸よりも細やゝのある活計の足にと朝から宵まで間なく拵げど多寡の知れたる女の手業の事あれバ多くの錢も得がたかるゐいよゝ貧苦に陷りけり爰に同國弘前の城主津輕越中守の家臣に夏目四郎三郎兼晴と云ふ者あり祿百二十石を領し實藏番を勤む是則ち仙太郎の父なりさて四郎三郎い仙太郎湯治ゐ赴さしより三月ゐまり過つれども皈り來らねバ如何せしゐやと苦慮やむ折から兼て仙太郎の伴させて松島へ行しめし僕忠助と云ふ者顔色かへて皈り來つ仙太郎お松を連て逃亡せし始末とくわしく物語れバ四郎三郎はじめ家内の者ども驚き呆れて言葉もなし然いとて此儘捨おくべきにあらねバ早速人を八方へ走らして沁あたりと落なくたづねさ

せぬれど皆たづねあぐんで皈り來るに四郎三郎も詮方あく此上い氣長にさづねじとて急ていさがしもせざりけり話説かいつて彼のゐ松い何卒夫の眼病を本復させたく思ふにぞ已れい三度の食を二度に減じ其病ゐ効驗ありと云ふ藥い力の及ぶかぎり求めて服さしむれども更に効能あらざれバ此上い神佛の利益を願ふより外いゐいと夫より毎夜隣村ある地藏堂へ詣り夫の眼病平癒を祈願あしぬさて一夜例の如く地藏堂へ參詣なして皈り路村さかへある松原へさしかゝりし折から傍邊の樹陰より顯れ出たる盜人二人

お松の左右に立ふさがり「斯吾僧等ゐ見つかッたい其方の不運だこと宵云いずに身ぐるみ脱で置て行ゐぐず〳〵吐すと撫切だぞと大刀ぬいて振まわし威しかゝれば尋常の女あらば驚きおそれて逃もすべきにお松い心雄々しき上に武藝に達せし者ゆゑ些とも騒がず「女と侮あどり威したとて其樣ゐ術にのる妾ぢやあい怪我せぬうちに退て通しやと大膽不敵の廣言に曲者怒つてエ、洒落せへ幻妻め其舌の根をとゞめて呉んと振上る刀をお松奪ひとり只一ト打ゐ其曲者を砍倒し返す刀に殘る一人の曲者と火花と散して戰ふ音ゐ樹蔭ゐ忍びて窺ひ居たる他の盜賊ども聞つけてソレ仲間を打すゐと云ひつゝ總て十二三人得物を携へ跳り出お松を中に取ゐめて無二無三に打てかゝるをお松右に支へ左に拂ひ忽地三人斬仆し五六人に手疵を負せし手練の程に盜賊ども此奴い叶いぬ逃ろ〳〵と皆ちり〴〵に逃去けりお松い好まぬ腕立なれば後おひもせず立去んと行その足へ賓繰る財布取上て見るに盜賊らの落せし物と見なて其裡に六七十兩の貴金あるにお松忽地慾心起り此金があれば當分い樂ゐ暮せる斗りでなく仙太郎さんの藥も心の儘のが買れやうと思ひにければ其儘懐中なして我家へこそい飯りけれさて翌日里人等彼の盜賊の死骸を見つけ驚きて名主へ届け夫より代官所へ訴へ出けるにぞ代官所ゐてい何者の仕業ゐるかと頻りゐ穿鑿せらるれども誰ゐつてお松の所業ゐりとい心づく人ゐかりけり爰に又お松い彼の金を得しより當分い安樂に送りしが次第に殘り少ゐになりたるにぞ又思ふやう假令盜人ゐもせよ人三人まで殺せし上ゐ其金を奪ひしなれば若ゝ顯れた其時い重き所刑にゐふい知てある然すれば今から心と改めたとて逃れる術いゐきものを永き浮世ゐ短い命エ、毒食ばい皿までた

と自分勝手の道理とつけて或夜ひろかに仙太郎の脇差を持出し笠松峠の麓にて通りかゝりの旅人を殺害し路用の金と奪しを手はじめに或い豪家に押入て財寶とかすめ或い旅人と殺して金銀と取りおどしつ一年ばかり送るうち一人二人と手下お從ふ者出來て末にい五十人余りに首頭と仰がれ近國に並ぶ者なき大盜人といなりぬ然れお松いいよゝ本夫お柔しくして兒をいつくしみ行狀以前よ變らざるゆゑ近隣の人々いさる惡事をはたらく者とい知るよし絶てあかりげり

○第三回

一夜お松手下二十人斗り引つれ近在ある加田村の豪農加田八郎兵衛と云ふ者の家に押入り思ふがまゝに金銀財寶をかもめ取手下の者よかつがせて笠松峠に登り山奥にて夫々うゞひし物を配分なして居る處へ一匹の猪あれゆゆれて走來るよ手下の者ども驚きおそれ右往左往へ逃まいるを猪牙よ引かけて彼方此方へ投散し猶も狂ひまいるに一同困じて居たりしがお松些とも怖れず短刀ぬいてまつ處へ猪勢も一層はげしく牙をあらし目をいからせ引かけんと飛來るお松すかさず身を跳らして其脊の上へ打跨り狂ひまわるを事ともせで眼をゞねらひて萬差とつく急所のいた手ゆさしもの猪も少しく弱るに得たりとお松刀とぬく暇あらざれゞ拳をかためて十ばかり眉間とめがけて續けうつ流石に猛き猪あれど大刀よ打たれてたまり得ず遂に血を吐平伏たり實に其擧動の勇ましさい昔時右大將頼朝公が富士の裾野お狩せし時よ仁田四郎が勇行も是にい及じと思されたり然れゞ手下の者どもい皆お松の猛方に舌とまき實に首頭の手練でい鬼神に逢とも後れいとるまじ

噫鬼神あり鬼神ありと云ひしより誰云ふとなく鬼神のお松と仇名して其黨類の者どもい日本國中知らぬ者なき程にぞありける爰ゝ又奥州八の戸へ宮内五郎高景と云ふ浪人あり元津輕越中守の家臣にて祿百石と領し寶藏番をつとめて居さりしが奸悪邪智の白徒あれば自さゝに寶藏の品を取出し密に沽却おして其金い酒色の料につかひ果しぬ斯する事たびくあるにぞ遂に夏目四郎三郎お見顕いされ夫がため祿を取上られし上放逐せられしかば詮方なく八の戸へ移り住居浪々のたつきあさゝ處の小兒等に手跡の指南をして漸く其日と送りけり是に引かへ四郎三郎い五郎の悪行と見あらいせし功おより三十石を加増ありて都合領地百五十石とありいよ〳〵殿の御寵よかりけり己れが不能を顧見ずして人の能をうねむい総て小人の常なるが高景我がよからを行ひぬ思い斯ありしい只四郎三郎故ありとて怨む事一方あらず何がお彼に仇をなし此鬱憤をはらさんと思ひ計りつゝとや二年ばかり過せしが一日不斗人の噂に近頃越中守い當將軍家より満干と名号し名刀を拜領あし寶藏に收めあるよし聞及びければ大きに喜び此太刀さへ盗を出さば四郎三郎奴い役義不取締りのかどおて放逐かさもなくば切腹仰せ付られるい必定左様ある時い日頃の恨を充分はれるト雀躍しつゝ弘前へ赴きある日大雨の夜に紛れて寶藏に忍び入り兼て案内知つたる事あれば難おく満干の太刀と奪ひ取り其夜のうちに江戸をさして逐電おせしが笠松峠の麓を通る折彼の鬼神お松の手下の者どもに出逢ひ是がため満干の太刀をはじめ金銀衣類を奪われし上ゝ其身手ひかひなせしかば遂ゝ切害せられしい犯せし悪事の天罰あらん

○第四回

爰に又津輕の館にてい翌朝に至りて始めて曲者の忍び入しを知り驚く事一方ならず諸士を八方へ走らせ盗賊の踪跡をかり求ひれども杜や何方へ逃失けん影だゝ見えねば詮術おく此旨殿へ言上なせしに殿よもいたく驚かせ玉ひしが思慮ふかき君故少しも疑ぐ事おく取敢ず寶藏番ある夏目四郎三郎をば前ちかく召寄られ其方苟且ゝも寶藏番を勤めあがら大切なる太刀を紛失させし段重々不届至極なり併しあがら是其方が故意ともつてなせしに非ざるい我ゝよく知る依て今日より向ふ百日暇つかいす間其中に吃度たづねて差出すべし若たづね得

ざるに於てい不便おがら切腹申し付るぞよと世にありがたき君命に四郎三郎忝けなく涙請して此前を退出し家ゑ皈りつ妻桃井に此旨を語り偖云ふやう先年お暇とありし宮内丸郎い日頃我を怨むよし聞及べば多分彼奴が遺恨をとらさんため我を罪におとし入んとてあせし業あるべし然もなくて余人の乱に入る事かたき賢癖の案内を何故て彼ほどに精しく知る者あらんや先左も右も八の戸に赴き彼が家の様子と見んと急き八の戸ある宮内の住居の近邊に至り夫となく様子とたづねば宮内い二三日前に出奔して行衛知ずとに四郎三郎さていよ〳〵彼奴に相違なしと思ひけるにぞ早速我家ゑ皈りて桃井およしを話し宮内の兄い江戸ゑ住居すると聞べ察する處彼い夫をたよりて赴きしなるべし咄引捕えて問だいさんと桃井に留守の締りをよくせよと吩咐つゝ急きの旅の事なれば忠助と云ふ僕僮一人を引連れ江戸をさして發足せしが日ならずして笠松峠の麓へさしかゝりし折四郎三郎不斗心づき忠助ゑむかひ吾後の立場の茶屋へ印籠と置忘れされば其方太義おがら取戻して來て呉よかし我い此先の立場の茶屋ゑて待うけんとに忠助応得て後の立場へぞ引かへしぬかくて四郎三郎い先の立場へ急がんと道をはや見て行程おく笠松峠へさしかゝれりそも此峠い街道第一の難所にて坂道七曲八折しつ其險難云ふべくもあらねど又勝景も少おからずさて四郎三郎い漸くゑ此峠を越え二十八丁の松原と云ふ處へさしかゝりし頃いはや日西山にいり棲へいそぐ群鴉の聲のみ喧すしく聞えけりさる程に四郎三郎大きに隙どりしと私語おがら道を急ぎて行折しも背後の方より年紀二十才ばかりある女髪をおどろゑ振乱し跣にて駈來りお侍さまお助け下さいと云つゝ袖ゑ取縋れば四郎三郎何事にやと様子

を聞に女い涙おがらゐ私しい此先の太田新田の者でゐ坐いますが今日用達に後の加田村まで參じました飯り路笠松峠へかゝりますと名代の悪い乞食どもゑ出あひ夫等に無体の事を云ひかけられて既に危ふひ處を漸く脱れて參りましたのでゐ坐いますト仔細を聞て四郎三郎元來憐そふかき性あるにぞ不便に思ひ僥倖拙者も此先へ參る者ゆゑ太田新田とやらまで送り得させんと打連だちて行程おく水背たかく聞ゆるお四郎三郎いぶかりて川のあるにやと問へゞ女如何ゑも瀬田川と申して然のみ深くもゐ坐いませんが水のもれが強い故往來の人い大体一町余り河下の土橋を通行いたします左様いたしますると二町ばかりの廻り路にありますると云ふに四郎三郎當惑せしが往復四町も廻り路をなさゞ夜も更るおらんと思ひけるにぞ詮方おく件の女を背負て河中へ入り淺瀬をもとむる隙をうかゝひ女いかねて用意の懐劔ぬく手も見せず背より拇も通れと突貫ぬく刃の冴にさしもの四郎三郎も苦と叫んでよろめくをものかさず女かさねかけて咽元鳥差と突しかゞ何かいもつて耐るべき四郎三郎い五十二才を一期として遂に果敢おくありゐけり

○第五回

畏ゐ忠助い後の立場へ立戻りて印籠を持返り只管路を急ぎて行く程ゑ笠松峠にさしかゝる折から傍邊に五六人ひれあし居たる乞食どもに喧嘩を仕かゝられ思いぬ隙をとりしかゞはや黄昏にありけるにぞ嘸や旦那様が待てゝあらうと足をとゝめて追駈たりさて件の女に四郎三郎の息の絶たるを覩ひ陸へ引あげて所持の金銀をはじめ大小の刀まで奪ひ取り死骸を河中へ蹴落さんとする折來かゝりたる彼の忠助朧ある月の光おすかし見て將しく曲者其處動くなと言つゝ走寄

り捕えんとするを女はふりはらひ暫く挑みあらそひしが女の勇やまさりけん忠助肚を拳もて突れ苦と氣絶せし隙ゐ女は何方ともなく逃去り忠助半晌あまり過て漸く我よかへりしかどはや敵手は何方へ逃行けん影だゐ知ねば詮方なく歩うち拂ひて起上り何處の旅人か知らねども非業の最期と遂られし噫あれさよと嘆息しつ死骸の顔を見て吃驚「ヤ、是やは旦那様か斯と知たら如何あつても敵手と逃すめへ者とエ、残念なト悔めど怒れど其詮あければ仕方なく〳〵夫が遺骸を近邊の寺へ脊負行き住寺にあつて譯を話し荼毘火葬して夫が遺骨を壺におさめ力あげきを忍びつゝ津輕をさして返り路浪花村へさしかゝりし折しも先夜曲者につかれし肚痛み出して堪難ければ僥倖持合したる印籠の藥を飲んと思ひるるゐぞ水を乞んと只ある家に立入たり此家の主人は別人あらず彼夏目仙太郎にて其眼病もお松の厚き介抱に漸く本復したりければ入來る忠助の顔見るより「珍しや忠助如何して此處へト問へば此方も驚きつゝ「左様仰やるは仙太郎様思ひがけあい此處でお逢申すも大旦那様のお引あいせかト絶て久しき對面の喜べしさに肚の苦痛も打忘れ進ひるまゝに草鞋脱すて坐敷へ上り仙太郎始めお松へも久々の面會の挨拶を述終り偖云ふ様「承いりたき事は山々なれど先お談し申さにやあらぬ一大事と是より瀧平の太刀紛失の事其詮義の爲四郎三郎江戸へ赴く途中曲者の爲に切害せられし始末精しく物語し上件の遺骨を收めし壺を出し示せば仙太郎聞事毎ゑ且驚き且悲み暫く詞もあるりけり側よお松は始終の話聞より仙太郎の脇差拔さま咽へ焉差と突立れば兩人大に仰天しつ何故の自害ぞと問にお松は涙を浮べ「語も面あき事あれど四郎三郎様と手にかけしい妾の仕業知ぬうちは兎

も角も知てゝ片時も生て居られぬ身の大罪其申譯お此自害又滿干の太刀い云々にて我手お
ありト先月手下の者旅の侍を害め奪し刀余り見事の燒刃故我差料になさんと思ひ添て有し
折紙を見しに世よ名高き滿干の太刀なる故いよ〳〵秘藏して爰に有ト委細語りつ戸棚より
太刀取出し是と館へ持參あつて再ゝ夏目の家名をお起しなされと云さしつ遂に息い絶
にゝり仙太郎始め忠助も暫く悲歎にくれ居たりしが斯てあるべきにあらざれば其死害を取
片附仙太郎滿干の太刀を携へて弘前の館へ赴き大守へ差上げるおぞ其功により夏目の家督
相續を免されたれば以前に變らぬ豐けき身となり忠助にゝ多年忠勤の賞として物數多與え
て用人とおしぬ又お松の腹に設けし政二郎い行末夏目の相續人にさせんとていと大切に養
育げるとあんめでたしく

實説双紙鬼神於松物語　大尾

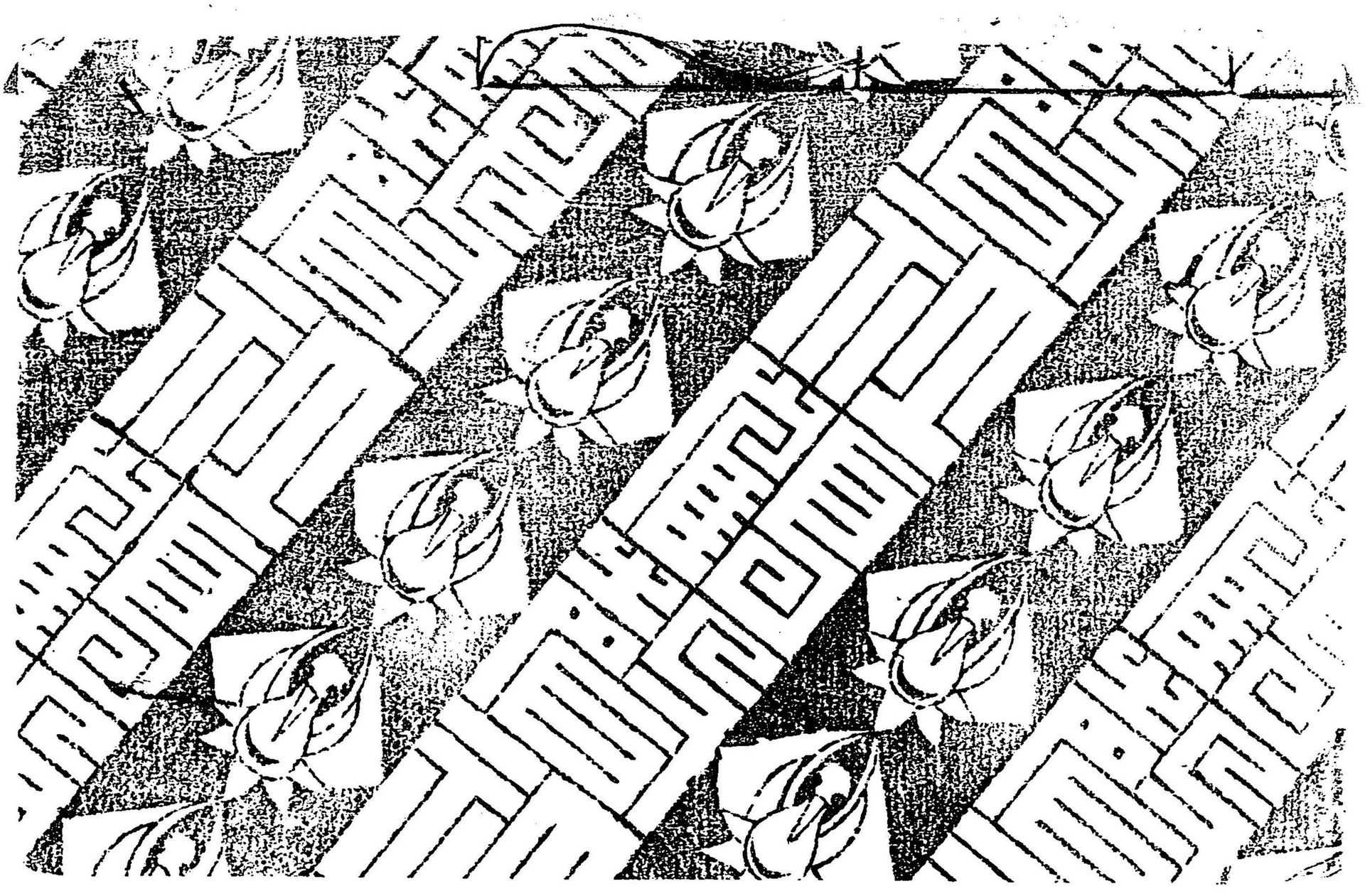
明治十七年四月二日御届

編輯兼出板人　東京府平民　森仙吉

日本橋區横山町貳丁目十六番地

定價四錢

一大岡天一坊政談
一同村井長庵政談
一同畔倉重四郎政談
一同越後傳吉政談
一同松田於花政談
一同水呑村九助政談
一伊賀越討仇
一山孝子討仇
一天下茶屋討仇
一白石孝女討仇
一營塚孝子討仇
一伊達顯秘錄
一佐倉義勇録
一船越重右衛門物語
一佐野次郎右衛門物語
一慶安太平記
一寛永箱崎文庫記
一中山岡苔代記
一名譽紀文一代記
一天草大禮記
一北雪金澤美談
一松前屋五郎兵衛記
一宇都宮騒動記
一彦左衛門一代記
一水戸黄門一代記
一皿屋敷怪談
一雛鶴大三代記
一奥田波戰記
一石山軍記
一豐臣西軍記
一清正朝鮮軍記
一佐賀怪猫傳
一日蓮上人御一代記
一親鸞上人御一代記
一祐天上人御一代記
一弘法大師御一代記
一中條姫一代記
一小野小町一代記
一小休諸國物語
一魁神於松一代記
一尼子十勇士傳
一高尾常右衛門物語
一毛谷村六助物語
一石川五右衛門一代記
一高田馬場義士戰記
一川中島大戰記
一鼠我物語
一爲朝弓勢記
一小栗判官一代記
一鏡山お初伝討
一鈴木主水物語
一お半長右衛門物語
一於旬傳兵衛物語
一國定忠次物語
一四ッ谷怪談
一阿波鳴戸順禮記
一梅川忠兵衛物語
一お七吉三物語
一お染久松物語
一花川戸助六物語
一於三茂兵衛物語
一三勝半七物語
一梅若松若一代記
一小野道風一代記
一將門一代記
一木曾義仲一代記
一義經辨慶一代記



特42
850

205112-000-0

特42-850

鬼神於松物語

梅亭　金香／編

M17

EDV-0117